

PROFILE

井 桶 慶 一

東北大学大学院
情報科学研究科情報生物学分野 教授
東北大学大学院
医学系研究科神経内分泌学分野 教授



生理学会に入会したのは1980年、医学部を卒業した年ですから四半世紀前になります。光陰矢の如しです。学生時代夏休みに生理学教室に遊びに行ったのがきっかけで、東大生理に移られた星猛先生を慕って上京しました。星生理では、カメラ膀胱膜を用いたプロトン能動輸送の電気生理学実験に携わりましたが2年間お世話になって、臨床に転向し、会津若松の竹田病院で内科研修医として修練を積んだ後東北大第二内科に入局しました。若い時のことで、未熟な判断もあったとは思いますが、医師としてはたらいてみたいという気持ちは正直なものでその後の臨床医としての人生に後悔するところはありません。しかしながら、たった2年間過ごした生理学教室での影響が一生を決定するほど重要なものであるとは、その時まで気付いておりませんでした。同級生より2年遅れて始めた初期研修では最初のうちハンディを感じましたが、逆に、論理的思考訓練を強く意識した「生理学体験」が大いに役立つこともありました。たとえば、わからない疾患、説明困難な病状など教科書に書かれていないことに遭遇した場合です。

学生時代は教科書が医学だと誤解していましたが、それは現実を映した鏡とは程遠く、まさに水面上に現れた氷山の一角に過ぎないのだ、ということは研修医時代の新鮮な「発見」であり驚きでもありました。わからない場合の武器は通常「観察」と「論理」以外にないと思います（あとは「直感」?）。実際、その時代の診断技術や知識では解決できない医学的問題が多いことも事実ですが、反面、丁寧に観察し、しっかりと論理的に推

論することを怠ったために正しい診断に結びつかない場合もあります。このような体験を経るうちに、診断プロセスが非常に論理的である内分泌学に強く惹かれ迷うことなくこれを専門として選びました。

内科の教室では内分泌中枢としての視床下部のはたらきについての研究に携わるようになり、以来「神経内分泌学」の虜になってしまいました。その後はほぼ一貫して、下垂体―副腎皮質系を調節するCRHニューロンと脳内ストレス伝達系の実験的研究に力を注いできました。縁あって4年ほど前に大学院情報科学研究科で研究に専念できる場を得て今日に至っております。これからは視床下部と脳内の他の領野との関連性についても研究の幅を広げたいと考えております。動物実験で得られた結果を臨床応用できる例はまだまだ限られておりますが、ヒト脳内でのストレス防御、情動、自律神経系調節などの理解を目指して研究を進展させていくのが夢です。

若い時の経験は脳の深いところに強烈にインプリントされるものようです。診療でも研究面でも生理の教室で学んだ「筋道立った考え方を重んじる姿勢」が今に至るまで私の指針となっております。長い間学会に出られない時期もありましたが多忙中であっても生理学会誌に目を通す時一服の清涼剤に似た心地よさがありました。遥か昔に知己となった先生方に助けられ、最近では神経内分泌学の存在意義を訴えようと一生懸命つとめております。今後どのような場で仕事をしようとも最後まで「生理学」は私の存在基盤であり続けること確信しております。

略歴

- 1980年 東北大学医学部医学科卒業，東京大学大学院医学系研究科博士課程入学（生理学専攻）
- 1982年 同中退，竹田総合病院内科研修医
- 1984年 東北大学医学部第二内科入局
- 1987年 ハイデルベルク大学薬理学教室客員研究員，翌年から助手
- 1990年 東北大学医学部附属病院助手（第二内科），岩手県立宮古病院内科長
- 1991年 東北大学医学部附属病院助手（第二内科）復職
- 1996年 ミシガン大学MHRI研究員（98年まで）
- 1998年 中国医科大学（瀋陽）客員講師
- 2000年 東北大学医学部附属病院講師（腎・高血圧・内分泌科），同医学系研究科助教授
- 2001年 同情報科学研究科教授（情報生物学），医学系研究科教授（神経内分泌学）（兼担）
- 2004年 同学際科学国際高等研究センター プロジェクト・リーダー（兼担）
- 2005年 RMIT大学（メルボルン）客員教授